長崎高教組新聞

発行
〒850-0013 長崎市中川２丁目２番５号
長崎高教組会館 長崎県高等学校教職員組合
☎ (095)-827-5882
FAX (095)-826-2976
編集責任者 平井秀治
一部 １０円

高教組メールアドレス
info@nagasaki-kokyoso.org

５４人目は 長崎東分会から届く

「また力を貸してください」「わかった」と加入

再任用で長崎東高に勤務する教職員が、８月下旬、高教組に加入しました。現職時代ももちろん、組合員でした。しかし、退職で途切れ、これを知った平井委員長が電話で「また力を貸してください」と勧誘。「わかった」と二つ返事で快諾し、加入が実現したもの。

ベテランの力も職場づくりには欠かせません。教育を語り、職場づくりをすすめるときベテランにサポートしていただきましょう。

今年度の加入者はこれで５４人となりました。その内訳は再任用等４５人、新規９人です。

２学期（後期）は文化祭や体育祭、新人戦など行事が多い期間です。教職員の連携が特に必要な時でもあります。

こうしたなかで長崎高教組を大いに語り、加入を勧めましょう。

是正要求 ６０km以上の長距離通勤者２倍に増加

配慮の徹底要求 子育て中の教職員人事

高教組は８月１６日、２０１２年度人事についての基本要求書及び農・水・工間の「交流人事」についての要求書を県教委に提出し、折衝を行いました。

人事で要求と折衝

折衝の中で高教組は、現在の「５地区制」の人事異動方針になって、６０km以上の長距離通勤者が約２倍に増加していることを指摘し、以前の「３地区制」に戻すことを改めて要求しました。

また、県教委自身が定めている「特定事業主行動計画」に従って、子育て中の職員について人事上の配慮を行うことを現場の校長に徹底することなどを求めました。

「交流人事」については、高教組が農・水・工の教職員を対象に行ったアンケートで、約６割の人が「問題がある」と答えていることを指摘し、「交流人事」は本人の希望があった場合のみ行い、恒常的な制度にしないことなどを求めました。

高教組の要求に対し県教委は、９月の中旬をめどに回答するとしました。

県教委「法を上回る配置は困難」と答えつつ 副校長・教頭は法を超えた数１０人

折衝ではまた、高教組が春闘教育長交渉（４月）の際に明確にすることを求めていた、①副校長・教頭の配置数と標準法の関係、②今年度の教諭の加配削減の理由について、県教委からの回答がありました。

①については、今年度の県内の高校・障害児学校全体の副校長・教頭の配置数は標準法より１０人多いことが明らかにされました。

これまで県教委は、高教組の教職員増員の要求に対しては、「標準法を上回る配置は困難」と繰り返し回答。

一方、副校長・教頭は「標準法を上回って」配置しているのです。人事管理行政に都合のよい配置と言わざるを得ません。

高教組は、これまでの交渉でも「複数教頭制を廃止して、生徒を直接指導する職種を増やせ」と要求してきましたが、今後ともこの問題を追及していく方針です。

加配減少理由に 県教委「再任用者の多さ」 生徒を直接指導する職種増こそ必要

②については、「標準法での加配定数等は変わっていないが、閉校やクラス減で標準法による教諭定数が６８人減少。加えて、再任用の短時間勤務者が想定より１１人分（フルタイムに換算して）多かったので、合計７９人減となった。県規定の配置基準に従うとクラス減に伴う教諭の定数減は６４人なので、あと１５人の削減が必要だった。閉校や複数配置の縮小で副校長・教頭が６人減となったので、残りの９人分を、これまで加配でつけていた分から減らすことになった」と説明しました。

この説明では、短時間勤務の再任用が増えると教諭の定数が減ることになります。しかし、再任用の希望を保障することは県教委の責任であり、それを加配減少の理由に挙げることは責任転嫁と言わざるを得ません。

「再任用は教職員定数と別枠に」という要求をさらに強める必要があります。

また、①と合わせて考えれば、副校長・教頭の配置数を標準法どおりにすれば教諭の加配数を減らさずにすんだわけです。から、「複数教頭制を廃止して、生徒を直接指導する職種を増やせ」という要求と合わせて追求していくことも重要です。

合格に向けて援助

２回目の教採対策講座に１５人

▲小論文対策　どちらも緊張します（高教組会館）

長崎高教組は、教員採用試験対策講座を５月に続き、８月２０、２１、２８日高教組会館で開きました。この講座では、模擬授業や個人面接、小論文を実施し、１５人の参加がありました。

面接官や小論文担当者は本部の役員、現職教員、高退教のメンバーが務め「合格」に向けての援助を精一杯行いました。

複数の受講者から感謝のメールが次のように寄せられました（一部）。

「面接・模擬授業の対策では、自分が出来ていない点について、的確に指摘していただき大変勉強になりました。小論文についても、改善点がわかり良かったです。２次試験まで残り時間は少ないですが、出来る限りのことはやりたいと思います。」

県教委 パック旅行旅費の改定を提案

交渉継続で １０月１日実施先送り

県教委は８月１６日、高教組に対し「パック旅行にかかる旅費の調整の見直しについて」の提案を行ってきました。

その内容は、現行の「パック料金から宿泊料定額の３分の２を控除した額をみなし航空賃として支給し、宿泊料については宿泊料定額を支給する」を「パック料金に夕食代相当額、朝食代相当額を加えた額から、宿泊料定額を控除した額をみなし航空賃（以下同じ）」と改訂するというもの。実施時期は１０月１日。

この提案に対し、高教組は２回の交渉（８／２５、９／１）を行いましたが、合意に至らず、１０月１日実施を見送らせました。交渉継続を確認しています。

○写真左・管野さん宅にて　石巻市狐崎（7／26）

宮城県牡鹿半島の漁村。小海魚養殖が盛ん。近海は甚大な被害にあった。港の復興に向けて、漁師さんたちは、海に出て、手作業で養殖の準備をしている。

○写真上の側溝のドブさらい　石巻市中里地区（7／29）

夏になると、暑さが増してくる。一面に漂うドブの臭いが辺り一帯に溝から生活排水が流れ出ている。人手がなくて困っているというこの地区に、高校生がボランティアで来てくれたというので、近所の方々がたいへん喜んでくださった。食べ物を差し入れての飲み物を流すと、涙を流した。

○昼ごはんは
おにぎりとカップ麺

◇震災支援ボランティア活動報告Ⅱ（終）◇

江頭清隆さん（佐工定分会）と 生徒３人の活動

涙を流してお礼を言われた

○写真右　石巻市門脇町捨喰の今野さんご夫婦と佐世保へ戻る日（7／30）

（写真中央）生徒3人が佐世保へ帰る前にぜひ今野さんのところに立ち寄り、あいさつをしてから帰りたいというので、道に迷うこと1時間、やっとの事でたどり着き、記念撮影。お母さんは子どもたちが宮城弁をマスターできるまで、楽しそうに指導されていた。

帰り際に失礼とは思いながら、佐世保から持って行った食料（米・カップ麺・お茶・レトルト食品など）や生活用品（トイレットペーパー・洗剤・ティッシュ）を差しだすと快く受けとっていただけた。

○写真右　石巻市でドブさらいを終えてご近所の方々（7／29）

気つ気いボ回も味うラ復のかコ温なとテだの泉？ィ！とこの作少業で後々終で今はおわ回り屋で、疲りとの元いれと

▲右端が江頭さん　左から後ろ３人が生徒

□7／30、31広島県で開催された母親大会に参加された川上英子さん（大崎高分会）から、その感想をいただきましたので紹介します（紙面の都合で一部略）□

寄稿　悲しいことば

初日の全体会には、総勢八千五百人が集まり、時間が経過するにつれて空席が無くなっていきました。

実行委員会の代表・高田公子さんは挨拶で、「東北の方々が四百人以上参加」と述べると、会場から大きな拍手が起こりました。高田さんご自身も福島、宮城に行ったことに触れ、「女子高校生が『どうせ被曝して結婚できないんだから』と教室の窓を全開にした」話を紹介されました。

（…こんな悲しいことばがあるでしょうか。）

高田さんは、「私たちの力で政治を変えよう。これからも繋がり、草の根運動を継続しよう。田畑と青い空のように焼かれて」を目にされ、語ることを決意。

話されることばは静寂な水面に一片の葉が舞い降りるようでした。

・憲法を守り、次世代の子どもたちに引き継ごう」と力強く呼びかけられました。

その後、パレードに参加しましたが、背負ったリュックが重く最後まで参加できなかったのは残念でした。

（自分で入れた中身でしたが、どうしてこんなに重いのか？）

二日目の分科会には、被爆体験を聞く学習会に参加。

被爆された方は1931年生まれ。女学校時代の12歳で学徒動員され、8月6日は朝から腹痛があり、自宅で休養。五百五十人いた学徒はこの方とあと一人の方を残して、亡くなられた。結婚されたものの被爆体験については沈黙を続けられた。原爆詩集「木の葉

（改めて私は原爆に対して無知だったと思いました。）

大会の二日間は、驚き、怒り、悲しみ、切なさ、様々な感情が溢れました。

映画「エクレール・お菓子放浪記」

＊未来に残したい、子どもに伝えたい、お菓子が紡ぐ希望の物語（原作・西村滋「お菓子放浪記」）

＊9／20チトセピア　9／21長崎市民会館　10／2県美術館　11／6長崎市民会館

＊チケット　1000円　高教組書記局に有り

シンヤ　ひとり旅　inアジア【Ⅲ】

シンヤさんは「私も今朝（注・8月9日）日本時間にあわせて黙祷させていただきました。私はカルカッタでマザーテレサの施設でボランティアをし、仏陀の聖地ブッダガヤを経て、インドのバラーナスに来ています。こちらで感じたことを書いてみました」としてメール便を寄せてくれました。

◆インドのバラーナスにて◆
「授かった命」をどう生かしていくか

旅に出て約３ヶ月。タイ、ミャンマーをまわり、今私はインドのバラーナスにいます。日本では感じることのなかったことで、旅先で感じることはたくさんあります。そして、日本にいては会うことのできなかったであろう人たちともたくさん出会いました。彼らのアイデンティティはものすごく、さまざまな刺激をビリビリと感じます。

英語をひたすら独学しているミャンマー仏教の僧。絵が好きで13歳からタトゥーの店で働いている刺青だらけの男。マザーテレサの建てた施設でボランティアを続ける人たち。フィリピンの政治家秘書の息子とそのいとこ。半年働き半年世界を放浪しているタイ在住のダイバー日本人。

私は今年で28になるのですが、同い年の日本人の旅人にもよく会います。世界を60カ国以上旅している人。ネパールの民族楽器、サーランギと現地語を習う為にネパールへ行く人。カメラとバイクが好きで、ベトナムをバイクで縦断しに行った人。

色んな生き方、考え方と出会い、いろんなことを考えます。私自身の、「授かった命」をこれからどう生かし、続けていくのか。これは自分にとって、非常に大きなテーマであると感じるとともに、また同時にどんな選択でも肯定され得るような気がします。

ガンジス川の川岸。積まれた薪と共に燃やされる、美しく飾られた死体を眺め、人の燃えた煙を浴びながら、そんなことを考えていました。　（元高校教師　続く）